琉球病院 Monthly

独立行政法人
国立病院機構　琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.96
2021. January

発行者　琉球病院事務部長
花木　成信

基本理念　この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

皆さん、新年あけまして、おめでとうございます。

院長　福 治　康 秀

旧年中は、各関連機関の皆さんには、各方面でお世話になりました。どうもありがとうございました。本年もまたどうぞよろしくお願いいたします。

さて、昨年は新型コロナウイルスの影響が大きく、各関連機関の皆さんへの影響も甚大で、大変なご苦労をされているものとお察しします。当院も、その都度スタッフみなで情報をシェアし考えながら進めてきました。幸い今のところクラスター発生はないものの、いつ発生してもおかしくない状況でしょう。現状、新型コロナウイルス感染は拡大しており、収束する気配は感じられません。その都度、できる対策を取りつつ、スタッフ全員一致団結で乗り切るしかありません。新型コロナウイルス感染症につきましても、各関連機関の皆様との連携が重要です。今後とも、どうぞよろしくお願いします。

当院は、今年さらに地域精神医療に向けて取り組みを進めます。また、各専門医療、救急医療の取り組みもさらに進めます。そのために、プロジェクトを立ち上げ動かしているところです。その際にも、各関連機関の連携がさらに重要となります。さらなる連携とご支援をどうぞよろしくお願いします。

今年の干支は十二支で言うところの「丑年（うしどし）」で、正確に干支を表すと「辛丑（かのと・うし）」となります。「丑（うし）」は芽が種子の中に生じてまだ伸びることができない状態を指すそうです。そして、「辛（かのと）」は「新」という字に通じ、植物が枯れて新しい世代が生まれようとする状態を指すそうです。よって、「芽を出そうとしている」「新しくなろうとしている」という意味になります。これはちょうど転換期ということになるのではないでしょうか。昨年の新型コロナウイルス感染症が制圧され平時の状況に戻っていく、その転換期というイメージを持ちます。また、当院としては、病院全体の将来構想を打ち出したところであり、今年はまさにその転換期となります。新型コロナウイルスが制圧されることを願うとともに、当院が更なるステージに上がっていくための転換期となるよう、職員一同、全力で頑張る所存です。

今年も、どうぞよろしくお願いいたします。

地域医療連携室だより

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。一般精神をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。また、中北部圏域を中心とした地域の皆様によりよい質の医療を提供し、適切な対応ができるよう充実した取り組みを行い、地域のニーズに応えられるよう日々努力していきたいと思っております。初診はじめ、受診については予約制となっております。

ご相談はお気軽に地域連医療携室までお問い合わせください。

院　長

ふくじ　やすひで
福 治 康 秀

1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。
1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。
95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。
日本病院・地域精神医学会理事。
琉球大学医学部　臨床教授。

診療科

- 一般精神科
- こども心療科
- 物忘れ外来
- アルコール依存症等外来

病床数　416床

・精神 （一般精神・クロザピン専門・精神科救急）	151床
・認知症治療専門	56床
・アルコール依存症	54床
・児童思春期ユニット	4床
・重症心身障がい	90床
・医療観察法	37床

那覇市からのアクセス

路線バス	那覇BS（下り）または名護BS（上り）より沖縄バス「77番名護東線」浜田バス停下車徒歩3分
自動車	那覇市から40分沖縄自動車道道金武インターから名護向け5分

お問い合わせ

時間	8:30 ～ 17:15 （土・日・祝日・年末年始以外）
TEL	098-968-2133（代）
内線	231・234

地域医療連携室（直通）

TEL	098-968-3550
FAX	098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療

医師　　木田　直也

クロザピンの治療状況

治療抵抗性統合失調症の患者様に対して、当院では2010年2月からクロザピン（CLZ）治療を開始し、全症例は延べ339例になりました。2020年12月のCLZ導入は5例で、このうち4例が他の病院からご紹介をいただきました患者様（入院中3例、通院中1例）でした。CLZ治療前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離や身体拘束が必要な患者様も多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動も消失、もしくは軽減し、隔離や身体拘束は、ほとんどの症例で解除できています。週に3回のCLZ専門外来も行っていますので、患者様のご紹介をお願いいたします。当院でのCLZ治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマ社の医療関係者向けサイトのクロザリル/クロザリルのご使用にあたって（https://drs-net.novartis.co.jp/dr/product/clozaril/guide/）でも動画が公開されていますのでご参照ください。

こども心療科

心理療法士　　仲間　信也

県から委託を受けている「子どもの心の診療ネットワーク事業」の人材育成の一環で、他機関職員を研修生として受け入れる取り組みを行っております。現在、この活動の更なる発展に向け「沖縄県かかりつけ医等発達障害対応力向上研修事業（以下「かかりつけ医事業」と記す）」との連携も進めています。

「かかりつけ医事業」とは、日頃から発達障害特性を有する方が受診する地域のかかりつけ医等（小児科、耳鼻科、内科、歯科等）を対象に、発達特性のある方への関わり方や配慮、支援までの繋ぎの流れについて研修することで、地域における発達障害への対応力向上を目的としています。「かかりつけ医事業」は1回の座学研修という学習形態のため、もっと学びを深めたい、体験的に学びたいと希望される方への学習機会の提供が課題となっていました。

この課題解決に向けて、「かかりつけ医事業」の受講者で実地研修を希望される方を対象に、「子どもの心の診療ネットワーク事業」を活用して研修生として受け入れる取り組みを始めています。

今後も、地域の支援体制整備に向けて様々な機関や事業と連携を進めていきます。この取り組みについてのお問い合わせはこども心療科（担当：心理療法士 仲間）までお願いいたします。

認知症医療

東Ⅲ病棟師長　　平 良　恵

我が国は、世界で最も速いスピードで高齢化が進んでいます。認知症は、誰もがなりうることから、多くの人にとって身近なものとなっています。

認知症の症状のひとつに帰宅願望があります。「家に帰りたい」と訴えたり、実際に家から出て行ってしまう症状です。頻繁に帰宅願望がある場合、介助者は焦りや苛立ちを感じる事があるかもしれません。しかし、声を荒げたりすると認知症の方は、不安や孤独感を強めてしまいます。大切なことは、「家に帰りたい」という表現の裏に隠れた思いに寄り添うことであり、一緒に話をしながら散歩をする、興味のあることに話を向けると落ち着くことがあります。

当病棟では、専門スタッフによる心理療法や精神療法に加え、レクレーションなどを取り入れた集団作業療法を行うことで、認知症の方に安心してもらえる療養環境を提供しています。

当院は、地域で暮らす認知症の方や家族を手助けする役割を担っています。認知症の症状で困っていることがあれば、地域連携室までお問い合わせください。

重症心身障がい医療

療育指導室長　　金城　安樹

障がい者虐待防止法では「正当な理由なく障がい者の身体を拘束すること」は身体的虐待に該当する行為とされています。やむを得ず身体拘束を行う場合として3要件あげられています。①切迫性：利用者本人または他の利用者の生命、身体、権利が危険にさらされる可能性が著しく高いこと。②非代替性：身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する方法がないこと③一時性：身体拘束その他の行動制限が一時的であること

当院の重症心身障がい病棟では、本人・ご家族への説明のもと、医療上緊急やむを得ず身体拘束または隔離等の行動制限を行うことがあります。行動制限を最小限にとどめる為、毎週、多職種によるカンファレンスを開催し、最も制限の少ない方法や短時間、行動制限を行わない支援に向けた方法を検討しています。利用者の行動観察や行動分析を行い、環境を調整した支援、評価する事を繰り返すなかで、行動制限の縮小へとつなげています。利用者の皆さんの安全に配慮すると共に生活の質が高められるよう、主治医を中心に多職種で取り組んでまいります。

アルコール・薬物依存医療

北Ⅰ病棟師長　　長　祥 子

明けましておめでとうございます。現在、病棟のホールを過ごしやすくするために改装を計画しています。当病棟は、入院の患者さんを『地域で生活する人』と捉えています。入院治療を行う場ではありますが、月単位での入院となるため少しでも地域生活とのギャップが少ないように整えているところです。依存症で入院される患者さんは、任意入院（ご自分の希望での入院）といっても周囲の方々から勧められて来られる方が多いです。少しでも入院しやすいよう、しらふでも安心して過ごせるように対応していきます。ご家族へは、コロナ禍のため家族教室は中止していますが、お電話や個別対応で支援を行っています。

お困りのことがあればご相談ください。

包括的地域精神医療

訪問看護師長　　嘉手苅 美智留

令和2年4月から12月までの訪問看護総件数は4,884件でした。新型コロナ感染拡大の影響で、沖縄県も緊急事態宣言が発令され昨年は8月に訪問看護を中止する事態となり、電話訪問に切り替えて利用者やご家族の支援を続けてきました。訪問に出向くスタッフも当然ながら感染防止に細心の注意を払いながら行ってきました。訪問看護が再開されても「電話訪問のままでお願いします」「玄関先でお願いします」と話される利用者や「薬のセットに是非来てほしい」「話を聞いてもらいたいので今日来てほしい」「外来受診を拒むので受診の大切さを説明し、受診に付添ってほしい」など反応も様々でした。コロナ感染は未だ終息の兆しが見えない状況ですが、今年も利用者やご家族の声に耳を傾け、寄り添う思いで個別の関わりを続けて行きたいと思っています。

臨床研究部活動状況

心理療法士　　前上里 泰史

新年あけましておめでとうございます。

昨年はCOVID-19の影響により、学会・集会・講演会・研修会等が中止となりました。また、多くの臨床研究が中止・延期となり、研究計画の変更を余儀なくされることもありました。代わりに、web開催やオンデマンド配信等を活用した新しい形での開催が急速に始まりました。研究方法は、ビッグデータの活用やAIを活用した研究は活況です。医療分野の情報化を政府は後押ししており、医療の在り方そのものが変わる兆しをみせております。より良い医療を提供できるよう新しい臨床研究を推し進めていくとともに、COVID-19が終息し、平穏な日々に戻るようお祈り申し上げます。今年もよろしくお願いいたします。